

幼稚園教育要領の「表現」に関する実践的検討 —音楽表現活動を支える楽器選択方法を中心に—

秋葉桃子*・井口亜希子**・新井英靖**

（2023年8月31日受理）

Considering the Nursery Practice about Expression for Children in Pre-schools: - How to Choice Appropriate Music Instrument for Nursery Children -

Momoko AKIBA*, Akiko IGUCHI** and Hideyasu ARAI**

(Accepted August 31, 2023)

はじめに

平成30年に出された幼稚園教育要領解説では、「変化が急速で予測が困難な時代」に対応するために、「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている」と指摘されている（文部科学省，2018b，p1）。これは，2015年の中央教育審議会から出された「何を学んだか（コンテンツ・ベース）」から「どのような力を身につけたのか（コンピテンス・ベース）」を重視する教育へと転換する必要があるという考え方が基礎にあり（中央教育審議会，2015，p17），幼児教育においても小・中学校と同様に従前の教育を大きく転換する必要があることが求められている。具体的には、「幼稚園教育において育みたい資質・能力として、『知識及び技能の基礎』、『思考力・判断力・表現力等の基礎』、『学びに向かう力，人間性等』の三つ」が示され，小学校で学ぶ教科学習との接続が強く意識されるようになった（文部科学省，2018b，p3）。

これまでの幼児教育は，第二次世界大戦後から，経験主義と系統主義の指導観が交錯していたが，近年では，個別の教科の「知識や技能」を取り上げて指導することに対して批判的な面もあり，自由保育の中で学ぶことが重要であると指摘されてきた（山内，2017，p82）。この点に関して，音楽表現活動を例に挙げると，諸井は「上手に歌う事や間違えずに楽器を演奏する事を目標とした音

*茨城大学教育学部音楽教育研究室（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1；Laboratory of Music Education, College of Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-City, Ibaraki, Japan 310-8512）.

**茨城大学教育学部障害児教育研究室（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1；Laboratory of Special Needs Education, College of Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-City, Ibaraki, Japan 310-8512）.

楽表現活動にならない」ようにするために、「音楽表現を担当する教員は、…一緒に楽しめるような表現活動を展開し、お互いの演奏や表現を認め合い、共感し合えるような活動」を提供することが重要であると指摘している（諸井，2020，p135）。

一方、中村（2018）は、幼児教育において育みたい三つの柱として示された「知識及び技能の基礎」、
「思考力、判断力、表現力等の基礎」、
「学びに向かう力、人間性」について、音楽表現の一つであるリトミックを取り上げて分析したところ、「知識及び技能の基礎」として、「リトミックでは、音の高低、強弱、フレーズ、リズム、拍子、拍、テンポ、音価、ニュアンス、アーティキュレーションなど、音楽の要素を感じたままに身体全体で即興的に表現することで音楽を理解していく」ことであると指摘している（中村，2018，p71）。また、リトミックにおける「思考力、判断力、表現力等の基礎」では、「ピアノが演奏されている間は歩く、ピアノが止まったら動きを止める、ある合図が聞こえたら指定された動作をする、音が変化したらそれにあった動作に変える」ことなどを挙げている（中村，2018，p71）。このように、楽しく主体的に学びながらも、育成すべき資質・能力を意図して保育を実践するといった分析的な視点をもって保育活動を見つめなおすことも必要であることが指摘されている。

以上のように、幼稚園教育要領は、小学校学習指導要領との接続を意識して、育成を目指す資質・能力を明確にした保育が求められているが、その一方で、自由な「遊び」を中心とした保育活動を展開することが求められている。こうした状況のなかで、どのような保育活動を展開し、どのような視点をもって指導するべきであるかという点を検討することが求められている。特に、本稿で取り上げる「表現」に関する領域は、「感性」を大切にする芸術科目の特性から、育成を目指す「資質・能力」を要素に分けて指導することが難しい分野であるため、幼稚園教育要領に示されている「表現」の領域では、どのような資質・能力を育成し、どのような点が指導のポイントであるのかという点を明確にすることが重要であると考え¹⁾。

これまでの先行研究では、音楽科において幼稚園教育要領と小・中学校の学習指導要領との接続について検討するものや（秋葉ら，2022），幼稚園教育要領をふまえた歌唱や器楽の指導について検討するものがある（基村，2018；朴，2022）。しかし、これまでの研究では、幼稚園教育要領に示されている「表現」領域の内容と幼児の発達の特徴との関連付けが弱かった。そのために、音楽表現に関する保育を行う際に、幼稚園教育要領に記載されている育成を目指す「資質・能力」と、保育実践との関係がわかりにくく、この領域を指導するときに「感性を育む」などといった抽象的な目標を設定することにとどまっている実践・研究が多い。

そこで、本稿では、音楽表現活動において幼児期に育てたい「資質・能力」を整理したうえで、それが幼児の発達過程にどのように位置づくものであるのかを明らかにする。そして、幼児教育で多く取り上げられている楽器や曲を発達の視点から分析し²⁾、資質・能力を育成するための教材選定のポイントについて検討することを目的とした。

研究の方法

上記の目的を達成するために、本稿では以下の2点を示すこととする。

- 1) 幼稚園教育要領に示されている「表現」領域の内容と幼児の発達の特徴

2)「表現」領域の資質・能力を育成するために有効な教材選定と指導上の留意点

幼稚園教育要領に示されている「表現」領域の内容と幼児の発達的特徴

(1) 幼稚園教育要領に示されている「表現」領域の内容の分析

まず、幼稚園教育要領解説に記されている「表現」領域の指導内容についてみていきたい。幼稚園教育要領解説では、「表現」の指導にあたって、以下のように記載されている（「表現」領域のうち「音楽」に関係する箇所を筆者が抜粋した）。

表1 幼稚園教育要領解説に示されている「表現」の指導内容

5 感性と表現に関する領域 「表現」	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。	幼児は、感じたり、考えたりしたことを身振りや動作、顔の表情や声など自分の身体そのものの動きに託したり、音や形、色などを仲立ちにしたりするなどして、自分なりの方法で表現している。
(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。	幼児が思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。ここで大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである。

(文部科学省, 2018b, p223, p228, p230)

このように、幼稚園教育要領解説では、「感じたこと」を音などで「表現する」という解説にとどまっていて、育成を目指す資質・能力が詳細に記載されているわけではない。また、幼稚園教育要領では、「表現」全体についての目標となっていたため、「音楽」や「美術（図画工作）」あるいは「体育（ダンス）」というような教科別に目標を設定しているわけではなく、音楽に関する内容も「簡単なリズム楽器を使って」という記載にとどまっている。幼稚園教育要領が以上のような全般的な「ねらい」の記述になっているため、幼稚園等における保育活動では、「楽しく表現する」ことが目標となり、音楽表現においても、「楽しく楽器を使って演奏できる」ということを目指した活動が展開される傾向にあると考える。

ただし、これは学習指導要領解説に細かく目標が設定されていないというだけで、発達段階をふまえた音楽の資質・能力を細かく設定することができないというわけではない。たとえば、特別支援学校学習指導要領では、音楽表現に関して、発達が1歳未満の重度知的障害児に対しても、音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽活動に参加して学ぶための「段階」が設定されていて、発達段階に応じた目標が示されている。具体的に、幼稚園段階の子どもと同じ程度の「段階」は、特別支援学校学習指導要領では「小学部3段階」に該当するが、この段階の子どもに対して音楽では、以下の目標や内容を設定して授業を行うことが示されている（表2・表3）。

表2 特別支援学校学習指導要領解説に記載されている小学部3段階の「音楽」の目標

知識及び技能	ア 曲名や曲想と音楽のつくりについて気付くとともに、音楽表現を楽しむために必要な身体表現、器楽、歌唱、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。
思考力・判断力・表現力等	イ 音楽表現に対する思いをもつことや、曲や演奏の楽しさを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。
学びに向かう力・人間性等	ウ 音や音楽に楽しく関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に興味をもつとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。

(文部科学省, 2018a, p161)

表3 特別支援学校学習指導要領解説に記載されている小学部3段階の「音楽（表現）」の内容

歌唱	【歌唱の知識】 ア 曲の雰囲気と曲の速さや強弱との関わり イ 曲名や歌詞に使われている言葉から受けるイメージと曲の雰囲気との関わり 【歌唱の技能】 ア 範唱を聴いて歌ったり、歌詞やリズムを意識して歌ったりする技能 イ 自分の歌声の大きさや発音などに気を付けて歌う技能 ウ 教師や友達と一緒に声を合わせて歌う技能
器楽	【器楽の知識】 ア リズム、速度や強弱の違い イ 演奏の仕方による楽器の音色の違い 【器楽の技能】 ア 簡単な楽譜などを見てリズム演奏などをする技能 イ 身近な打楽器や旋律楽器を使って演奏する技能 ウ 教師や友達の楽器の音を聴いて演奏する技能
音楽づくり	【音楽づくりについての知識】 ア 音遊びを通して、音の面白さに気付いたり、音楽づくりの発想を得たりすること イ どのように音を音楽にしていくなについて思いをもつこと 【音楽づくりの面白さに気付くための知識】 ア 声や身の回りの様々な音の特徴 イ 簡単なリズム・パターンの特徴 【気付きや発想を生かした表現や、思いに合った表現をするために必要な技能】 ア 音を選んだりつなげたりして表現する技能 イ 教師や友達と一緒に音楽の仕組みを用いて、簡単な音楽をつくる技能
身体表現	【知識（身体表現に関して次の点に気付くこと） ア 曲のリズム、速度、旋律 イ 曲名、拍やリズムを表す言葉やかけ声、歌詞の一部 【技能（思いに合った体の動きで表現するために必要な技能） ア 示範を見たり、拍やリズム、旋律を意識したりして、身体表現をする技能 イ 音や音楽を聴いて、様々な体の動きで表現する技能 ウ 教師や友達と一緒に体を使って表現する技能

(文部科学省, 2018a, pp161-167；一部、抜粋し、筆者がまとめた箇所がある)

以上のように、特別支援学校学習指導要領では、曲（あるいはリズム）の速さや強弱などを意識することが音楽における「知識」にあたり、その知識をもとにして歌ったり、楽器を弾いたりすることが「技能」ということになる。もちろん、特別支援学校の児童生徒は、一般の幼稚園に通う子どもたちよりも、生活経験は多く、さまざまな曲を聞いたことがあったり、楽器に触れる機会も多いかもしれないため、一般の幼稚園児がこの目標・内容と同様の活動に参加できるかどうかについては検討の余地がある。しかし、上記に示した特別支援学校学習指導要領における「小学部3段階」の子どもたちが、幼児期の発達段階の子どもでもあるならば、幼稚園などの保育活動のなかで、「曲（あるいはリズム）の速さや強弱などを意識する」ことはできるだろうし、それをもとに、自分なりの表現へと発展させるように実践することは可能であると考ええる。

(2) 小学部2段階から小学1年生の音楽の目標—器楽を中心に—

それでは、幼児期の音楽表現活動において、子どもたちの「発達段階」をふまえると、音楽表現活動において、「どのような資質・能力」を目標とし、「どのような活動（保育者の関わり）」を提供すればよいかという点をさらに詳細に考えてみたい。ここでは、音楽表現活動において「できること」が明確に示せる器楽を取り上げ、前節でみた特別支援学校学習指導要領の小学部3段階の前後の目標を示しながら検討したい。

まず、特別支援学校学習指導要領の小学部3段階の前後の目標のうち、器楽分野に関することを抜き出し、整理すると以下の通りになる（表4）。

表4 特別支援学校学習指導要領の小学部3段階前後の音楽（器楽分野）の目標

	小学部2段階	小学部3段階	中学部1段階*
知識	ア 拍や曲の特徴的なリズム イ 楽器の音色の違い	ア リズム、速度や強弱の違い イ 演奏の仕方による楽器の音色の違い	ア 曲の雰囲気と音楽の構造との関わり イ 楽器の音色と全体の響きとの関わり
技能	ア 範奏を聴き、模倣をして演奏する技能 イ 身近な打楽器を演奏する技能 ウ 教師や友達と一緒に演奏する技能	ア 簡単な楽譜などを見てリズム演奏などをする技能 イ 身近な打楽器や旋律楽器を使って演奏する技能 ウ 教師や友達の楽器の音を聴いて演奏する技能	ア 簡単な楽譜を見てリズムや速度を意識して演奏する技能 イ 音色や響きに気を付けて、打楽器や旋律楽器を使って演奏する技能 ウ 友達の楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能

* 特別支援学校学習指導要領の「中学部1段階」は、発達段階からすると、小学校1年生程度の知識および技能を想定した目標となっている。

以上のように、特別支援学校学習指導要領解説では、「器楽分野」においても、子どもの発達に応じて知識や技能が変化（発展）していることがわかる。たとえば、「知識」に注目すると、「特徴的なリズム」に注目することができるようになったあと（小学部2段階）、「リズムだけでなく、速度や強弱の違い」に気付くことができるようになり（小学部3段階）、続いて「曲の雰囲気と音楽

の構造」³⁾について理解することへと発展すると記されている（中学部1段階）。また、器楽の「技能」に注目すると、「身近な打楽器を演奏する（楽器をたたいて音を出す）」ことが目標となる段階（小学部2段階）のあと、「打楽器と旋律楽器を使って演奏する」ことへ発展し（小学部3段階）、続いて「音色や響きに気を付けて、…演奏できる」ことが目標となることが特別支援学校学習指導要領解説に記されている。

これらは特別支援学校において「音楽」の授業を行う際に、知的障害児に対する「目標」を設定するための項目であるが、幼児教育において、発達段階をふまえ、どのような楽器を用いて音楽活動を展開すればよいかを考える参考にすることもできる。すなわち、表4に示した発達段階の子どもの音楽活動を計画する際に、どのような楽器を用いて、どのような点に留意して指導するかを考える指標となるだろう（具体的な楽器選定のポイントは以下に詳述する）。

（3）幼児期のリズムや旋律の理解を深める音楽表現活動の指導

現行の学習指導要領では、「主体的・対話的な学び」を展開するとともに、「深い学び」を実現することも求められている。すなわち、演奏できる楽器を持ち、音を奏でて楽しく音楽表現活動を展開することは重要であるが（主体的・対話的な学び）、それとともに、リズムや旋律を深く理解することも求められる（深い学び）。これは、楽譜が読めることや、作者の名前を知るだけの表面的な理解ではなく、「リズムや旋律を子どもたちなりに深く理解する」ことである。こうした視点をもって音楽表現活動を指導する教師は、そもそも幼児期にリズムや旋律等の音楽表現はどのような発達過程を経るのかを知っておく必要がある。

まず、音楽のリズムや旋律等を理解する基盤となるのが、聴覚の発達である。聴覚は、生後の学習によって次第に高められていく性質をもっている。子どもは身の回りの音に主体的に関わっており、生後3か月頃には声や音の調子の違いを聞き分けることが可能となり、生後7か月頃以降には視界にない音源を探そうとする様子や、話かけや歌声によく反応する様子が観察される（田中ら、1978）。ただし、乳幼児にとって様々な重なり合った音から必要な音を選んで聞くこと（選択的聴取）は難しく、この力は4歳以降に徐々に発達していくものであることに留意が必要である（嶋田ら、2019）。例えば、楽器の演奏の活動時に、子どもの声や楽器音が大音量で反響する環境では、その音楽表現活動でねらいとするリズムや旋律を十分に感じ取ることができず、深い学びに発展しにくい可能性が考えられる。そのため、音楽表現活動の指導においては、幼児の発達段階や活動のねらいに応じて、聞き取りやすい楽器の選択、活動場所の反響音を減らす配慮などの工夫が必要になる。

次に、音楽の要素の中でも比較的早期に習得されるリズムの発達を中心に概観する。乳幼児期のリズムの表現は、大人の発する歌声や身体の動きからリズムを感じ取り、それを身体的に模倣して自分なりに遊ぶことから始まる（持田、2010）。生後9か月頃には音楽に合わせて手を叩いたり、机を叩いたりする、生後11か月以降には馴染みのある音楽が聞こえると手や首を振るなど、リズムに合わせて身体を動かす様子が観察される（田中ら、1978）。また、幼児がリズムを表現する際には、他者との関係性の中でリズムを合わせることを楽しんでいる（持田、2010）。3歳児・4歳児・5歳児を対象とした「きらきら星変奏曲ハ長調k265」のピアノ生演奏に併せて手拍子をさせる課題（水野・津崎、2020）では、①音楽の拍に同期して手拍子をしたと推定される人数の割合は年齢とともに有意に高くなること、②集団による手拍子の時間的まとまりを示す同期度は3歳児－4歳

児間に有意差はなく、4歳児－5歳児間に有意差が認められることが示されている。幼児が親しみやすい楽曲では、5歳頃に集団で打拍のタイミングが揃い、合奏能力が高まると考えられる。ただし、幼児には至適なテンポがあり、500msec（ $\text{J}=120$ ）⁴⁾前後の間隔では打拍を合わせやすいが、それより間隔が大きいと打拍のずれが大きくなり、音楽のまとまり（gestalt）として捉えることや動作の制御が難しくなることが報告されている（佐々木、2012）。そのため、まずは子供の至適なテンポに合わせて同期を楽しむことから始め、ときに慣れ親しんでいる曲のテンポや音の高さを変えて楽しむなどの発展的な遊びを取り入れることで、変化への気づきから、リズムや旋律の理解につながると考えられる。


また、歌うことと併せて、手拍子や身体を動かしてリズムを取る等のような複数の行為を同時に行う音楽表現活動では、発達段階に応じた留意が必要になる。例えば、手遊び歌（例：「げんこつ山のためきさん」）では、4歳頃はリズムに合わせて手を動かすことへの注意配分が大きくなり、歌と併せて手を動かすことが難しい場合が多く、5歳頃になって歌いながら手を動かすことのパフォーマンスに個人差が見られなくなることが報告されている（遠藤、1998）。そのため、幼児期は正確性を求めるよりも、個々の幼児が身体を動かす、歌う、楽器を奏でるなど、自己の表現しやすい方法で、他児とリズムを合わせるなどの音楽表現活動を楽しめるような工夫が必要になる。

以上より、3歳から5歳の幼児期は、大人や他児との関わりの中で、音楽を共有することを楽しみ、さまざまな音楽表現が豊かになっていく時期である。特に4歳から5歳にかけては発達的な変化が大きく、前述した特別支援学校学習指導要領に示される小学部2段階から3段階への移行期にあたりと予想される。このような発達段階を念頭に置くことで、幼児の主体的・対話的な学びから、深い学びを実現する音楽表現活動への発展が望まれる。

「表現」領域の資質・能力を育成するための教材選定と指導上の留意点


ここまで整理してきた音楽に関する幼児期の発達と指導目標をふまえて、幼児期における音楽表現活動を促進するためにどのような楽器や曲を選定し、どのような点に留意して指導するかという点を以下に示していきたい。

表 5-1 音楽表現活動を楽しむための楽器と指導上の留意点

ねらい	楽器	指導上の留意点（③④⑤は年齢を示している）
「拍や曲の特徴的なリズム」に注目することができる楽器 「リズム・速度・	 鈴・リングベル	③握って振る動き（片手）の連続が難しい場合は、反対の手で叩いたり、腕や足首にリングベルを着用したりして動いたタイミングで音が鳴るように配慮する。④⑤両足にリングベルを付けスキップ(♪♪)のリズムを体感したり、あえて小さい音で音楽を再生し、それに合わせて強弱を調整したりできるようにする。

<p>強弱の違い」に気付くことができる楽器</p>	 <p>カスタネット</p>	<p>残響が少ないため、細かなリズム(♪♪)やシンコペーション(♪♪♪), 休符を伴う演奏(♪♪)に向いている。③「幸せなら手をたたこう」のように歌の合間に叩く曲を選曲する。④歌曲のオノマトペ部分に合わせて言葉のもつリズムを感じながら叩けるようにする。⑤「ふしぎなポケット」のように歌詞の内容から手拍子を入りたい部分を決めて、歌詞の内容に合わせて強弱を工夫して叩けるようにする。</p>
	 <p>トライアングル</p>	<p>③スタンドに吊るして幼児が叩くことに集中できるようにし、強さや音の長さを変えて示す。④トレモロ奏から幼児がイメージした言葉をもとに選曲する。伸ばしている間、拍を意識できるように拍を数えるなどする。⑤本体を握ったり離したりすることを繰り返すことで規則的なリズム(ビート)が生じるため、規則的なリズムの繰り返しことで拍に着目できるようにする。</p>
<p>「楽器の音色」に注目できる楽器</p> <p>「演奏の仕方による楽器の音色の違い」に気付くことができる楽器</p>	 <p>マラカス・シェイカー</p>	<p>③選択的聴取が発達途中であることから、同じ音がするかどの音が好きかなど幼児自身の音が確認できる環境づくりに配慮する。④⑤事前に、中が見えない容器に砂、水、どんぐりなどを入れたマラカスを準備し、中身を当てるクイズをして、音への関心を高める。友達とマラカスをつくって鳴らし合う中で、容器や入れる物の量によって変化する音色に着目し、その音から抱いたイメージを開き取るようにする。</p>
	 <p>木琴・鉄琴</p>	<p>③④⑤タンブリン・カスタネット・トライアングルは、素材が皮・木・金属と異なるため、比較することで「楽器の音色」に注目できる。鍵盤楽器も同様であるが、人数分用意することは難しいため、ザイロホーン(写真上)やサウンドブロック(写真下)のように鍵盤を取り外して叩ける楽器を活用することで、一度に複数人が音色を比較できる。⑤演奏の仕方による音色の違いは、素材や硬さの違うマレットで叩き比べたり、数名の幼児が順番に自由な強さで叩いたとき、響き方は一緒だったのかを聴き比べたりすることで違いに気付けるよう、声掛けをする。</p>

表 5-2 「リズム」や「旋律」を楽しむための楽器と指導上の留意点

ねらい	楽器	指導上の留意点
<p>楽器をたたいて音を出すことを楽しむ曲</p>	 <p>和太鼓(小/大太鼓)</p>	<p>曲例：「村まつり」「ソーラン節」「もうじゅうがりにいこうよ」</p> <p>③④⑤曲に合わせて面(ドン)とふち(カッ)を自由に組み合わせ叩く。ドドンガ(♪♪♪)やドンッカカカ(♪♪♪)のように叩くリズムを言葉で表し、口唱歌の真似をすることで幼児がリズムを歌いながら覚えらるるようにする。</p>

	 <p>キッズドラム・タンブリン</p>	<p>曲例：「いとまきのうた」「おもちゃのチャチャチャ」</p> <p>③♩=100～120 の速度で、2・4 拍子の曲を主に扱う。1 拍目から歌が開始する曲(弱起ではない)を用いて、拍子に合わせて叩く。</p> <p>④⑤歌いながらオノマトベに合うリズムを叩く。キッズドラムは軽量で、ツインボールの素材も柔らかく、曲に合わせて動きながら楽器を叩く上で安全性が確保できる。</p>
	 <p>ウッドブロック</p>	<p>曲例：「とけいのうた」「シンコペーテッド・クロック」</p> <p>高さの異なる 2 つの音は、時計の振り子や大人と子供、山びこなど様々なものを表現できるため、③④曲に合わせて叩く他に、生活の中の音探しをしたり、1 音ずつ担当して 2 人でお話をしたり、⑤集団で打拍のタイミングを揃えて叩いたりできる選曲をしたり、幼児が生活の中の音に着目できるようにする。</p>
打楽器と旋律楽器を使って演奏を楽しむ曲	 <p>ドレミパイプ</p>	<p>曲例：「かえるのうた」「子ぎつね」「ドレミのうた」</p> <p>④旋律楽器の導入は、順次進行が多く、使用音が 5 音程度で跳躍や付点音符の少ない曲を選び、裏拍は捉えにくいため発達段階に応じて追加するよう配慮する。打楽器はカスタネットやキッズドラムなどを用いて 4 分音符や 8 分音符(休符)を組み合わせたリズムで叩くことで、曲の速度や拍を示したり、⑤「ドレミのうた」は休符から始まるリズム(♩ ♪)を多用したりするなど、幼児が表現可能なリズムの組み合わせを、工夫する。</p>
	 <p>ベル・チャイム</p>	<p>曲例：「よろこびの歌」「聖者の行進」</p> <p>⑤合奏曲の中でも、♩=120 程の速さで旋律が表拍で始まり使用音が 8 度(1 オクターブ)以内の楽曲を選択する。ベルは残響が長く伴奏にも向いている。主要三和音で完結する曲を選び、伴奏として旋律楽器を用いることで、打楽器のリズムを聴きながら旋律楽器を演奏することができるようにする。</p>
音色や響きに注目して、演奏を楽しむ曲	 <p>打楽器</p>	<p>曲例：「あめふり」「虫のこえ」「ゆかいなまきば」</p> <p>③④⑤マラカスに限らず、歌詞の中にあるオノマトベを音(旋律を除く)で表すと「どの楽器の音が合うだろう」という問いかけをしながら、自然の中の音と楽器の音色に着目できるようにする。</p>
	 <p>旋律楽器</p>	<p>曲例：「うみ」「たなばた」「ゆうやけこやけ」</p> <p>③④⑤旋律楽器は、ヨナ抜き音階などの五音で演奏可能な楽曲、残響が長い鉄琴はややゆっくりの速さなど、音色や響きに注目できる曲を選ぶ。楽器の音からどんなイメージがするのかを聴取するだけでなく、季節の歌などを歌う際、どんな楽器で演奏したいかを考えられるような声かけをする。</p>

以上、ねらいに合う楽器やそれを用いて演奏する楽曲、指導上の留意点についてまとめたが、これらのねらいは幼児の興味・関心に合わせて組み合わせっていくものであり、例に挙げた楽曲と楽器の組み合わせもこの限りではない⁵⁾。楽器や楽曲の選択は、幼児が自発的に音楽表現を楽しむために必要不可欠である。石川・村上（2017）は、2歳児に適した楽器として、鳴らすための撥（バチ）などが必要なく、そのもの自体で叩いたり弾いたりすることで音を出すことができるものを挙げている。楽器を選定する際は、モノとどのように関わり、それを扱うかは子どもの精神面および身体・運動側面の発達段階と密接に関連しており、また使用するモノ（楽器）の特徴や共にいる他者の存在によってもかかわり方が変化することを踏まえることが必要とされる（石川・村上，2017）。

そのため、上記の表中の選曲については歌に合わせて叩いたり弾いたりすることを基本として、年齢ごとの平均的音域である、3歳はイから一点イ音、5歳はイから二点ハ音の音域の範囲内の歌曲を中心に示した。また、4歳から5歳にかけて徐々に歌いながら演奏したり、合奏をしたりすることができるという発達段階を踏まえて、「打楽器と旋律楽器を使って演奏を楽しむ曲」は、音を分担して演奏を行う旋律楽器について指導上の留意点を中心に示した。

しかし、3歳児が打楽器を担当して一緒に合奏することを考慮し、J = 120前後の速度や、反復するリズム、少ない音数の条件に当てはまる曲を例として挙げた。「音色や響きに注目して、演奏を楽しむ」ことをねらいとした楽器には、あえて打楽器と旋律楽器の大きく二つに分け、オノマトペを含む楽曲や童謡、四季の歌などと関連させることで、幼稚園教育要領解説の「表現」の指導内容に示された、感じたり考えたりしたことを自分なりの方法で表現したり、自分の気持ちを込めて表現することを楽しんだりすることに繋がるよう意図した。また、3、4歳の子どもはリラックスしている状態において、緊張している状態よりも幅広い声域を顕在化できる（熊坂・浦方，2021）ため、楽器に触れる機会が特別なことではなく、日常的に自由に叩いたり弾いたりできる環境づくりも必要であると考ええる。

まとめと考察

本研究では、幼稚園教育要領に示されている「表現」領域の内容と幼児の発達の特徴を関連付け、音楽表現活動を指導する幼稚園教諭がどのような資質・能力を育成することを目標にして指導を進めていくのかという点を明らかにすることを目的とした。そのうえで、発達の特徴をふまえ、幼児が音楽表現活動に主体的・対話的に参加することができ、かつ、その活動が幼児の音楽的な見方・考え方を働かせ、「深い学び」へとつながる保育のあり方について検討することを目的とした。

その結果、幼児期の音楽表現の発達は、大人や他児との関わりの中で音楽を楽しむ経験を通して、豊かになっていくことが示された。特にリズム表現は幼児期に著しく発達し、身体運動の発達と相まって、音楽に合わせて身体を動かす、手拍子をする、楽器の演奏をするなどのさまざまなリズム表現が可能となっていく。ただし、幼児に至適なテンポでない場合には、リズムに合わせて打拍することが難しいこと（佐々木，2012）、5歳頃になるまでは、集団で打拍のタイミングを揃えること（水野・津崎，2020）、歌いながら手を動かすこと（遠藤，1998）に個人差が大きいことに留意が必要である。このような幼児期の音楽表現の発達段階を念頭に置き、活動のねらいや使用する楽器などを検討することで、幼児の主体的・対話的な学びから、深い学びを実現する音楽表現活動への発展

が望まれる。

次に、幼児期において器楽表現の活動を促進するための楽器と楽曲、指導上の留意点について検討する中で、幼児向け歌集や合奏曲集に取り上げられている楽曲と、小学校の音楽の教科書で取り扱われている楽曲（小学校の歌唱共通教材など）が重複していたことが本稿から示された。つまり、同じ楽曲であっても、発達段階と幼児や児童の興味・関心に応じて、歌唱なのか器楽表現なのか、歌いながら楽器を演奏するのかを指導者が適切に判断する必要があるということである。楽器についても、3歳児であれば一つの動作で音が出て即時的に表現が可能な楽器、5歳児ならば叩く強さや物を幼児が考えて出た音を感じ取ったり、音を分担して一つの旋律を演奏したりことで、イメージと合う心地よさや、他児と合わせる心地よさを味わえるような楽器を選ぶことが、器楽活動の充実に繋がるだろう。

また、「深い学び」を実現させるために留意したいことは、幼児が獲得した器楽の知識や技能が、「思考力・判断力・表現力」とどのように関連しているかということ、指導者が幼児の表現活動の中から見とり、価値づけする視点をもつことであると考え。そのため、より幼児が楽器や音色の特徴に気付いたり、音や音楽からイメージを膨らませたりできるように、発達段階に応じて音域や速度に配慮した楽曲の選択、合奏の設定する必要がある。加えて、楽器の音に触れたり楽曲の演奏をしたりする中で、曲例にも挙げた生活音や四季、日本の伝統的な音楽文化との関連を図ることで、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」が往還し、「深い学び」の実現へつながると考える。

この点に関して、小学校学習指導要領音楽第2章第6節音楽「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1(6)には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい(10)の姿(以下 姿)」との関連や、小学校入学当初において生活科を中心とした合科的・関連的な指導などの工夫をすることなど、幼稚園教育との接続について示されている。もともと、生活音や四季、日本の伝統的な音楽は、姿(4)の「道徳性・規範意識の芽生え」や、姿(7)の「自然との関り・生命尊重」、姿(10)の「豊かな感性と表現」などと密接に関わっている。また、音楽は、生活科や道徳科、国語科などと関連づけることもできる。こうした点をふまえると、幼稚園教育において音楽表現を充実させることは、小学校の音楽科をはじめ、多くの教科・領域における学習と接続するものであり、意義があると考え。

注

- 1) 幼稚園教育要領の「表現」領域は、音楽・美術・体育などの各教科が関連している。そのため、幼児教育における「表現」領域を検討する際には、関連するすべての教科について検討すべきであるが、各教科の本質をふまえないければ、深く検討できないため、本稿では教科「音楽」を取り上げて検討する。
- 2) 本稿では、新しい楽器や曲を紹介するものではなく、これまで幼稚園や保育園の音楽活動で多く用いられてきた一般的な楽器や曲を取り上げることにする。それは、本稿はあくまでも幼児期に育成すべき資質・能力を指導者が意識して楽器や曲を取り上げられるようにすることを目的としているからである。
- 3) たとえば、速度の速い音楽は、曲を聞いて「急いでいるような感じ」がわかるなどがこれにあたる。なお、特別支援学校学習指導要領において「中学部1段階」は、「小学校1・2年生」の知的発達を想定して目標や内容を設定している。
- 4) 楽曲の絶対的な速度を数字で示す速度記号。数字は1分間に奏される拍(beat)の数であり、「J」= 120

は1分間に1拍を四分音符として120拍打つ速さ，という意味である。

- 5) 表中（「表現」領域の資質・能力を育成するための教材選定と指導上の留意点(2)「リズム」や「旋律」を楽しむための楽器と指導上の留意点）の曲例は，赤羽（2017），木村（2014），小原ら（2019），土屋（2022）または森ら（2018）に掲載される曲から選定した。

引用文献

- 赤羽美希. 2017. 『たのしい楽器あそびと合奏の本 伴奏CD付き』（ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス）.
- 秋葉桃子・谷川佳幸・藤田文子. 2022. 「幼稚園教育要領と小・中学校学習指導要領の音楽科に関する内容と教育方法の特色と課題」『茨城大学全学教職センター研究報告（2022年版）』1-12.
- 石川真佐江・村上康子. 2017. 「2歳児の楽器遊びにおけるモノとのかかわりの特徴—楽器へのアプローチの違いに着目して—」『音楽教育実践ジャーナル』15, 104-113.
- 遠藤晶. 1998. 「幼児の手あそびにおけるパフォーマンスの年齢による変化」『発達心理学研究』9(1), 25-34.
- 小原光一・飯沼信義・浦田健次郎監修. 2019. 『小学生の音楽1』『小学生の音楽2』『小学生の音楽3』（教育芸術社）.
- 木村鈴代. 2014. 『新・たのしい子どものうたあそび—現場で活かせる保育実践—』（同文書院）.
- 基村昌代. 2018. 「幼児の音楽活動における指導の一考察—音楽劇制作の歌唱表現に焦点をあてて—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』17, 111-124.
- 熊坂好孝・浦方郷成. 2021. 「幼児の声域を広げるための実践研究—3, 4歳児の歌声を楽しく無理なく引き出す教材の試用から—」『音楽教育実践ジャーナル』19, 104-113.
- 佐々木玲子. 2012. 「子どものリズムと動きの発達」『バイオメカニズム学会誌』36(2), 73-77.
- 嶋田容子・志村洋子・小西行郎. 2019. 「環境音下における幼児の選択的聴取の発達」『日本音響学会誌』75(3), 112-117.
- 田中美郷・小林はるよ・進藤美津子・加我 君孝. 1978. 「乳児の聴覚発達検査とその臨床および難聴児早期スクリーニングへの応用」『Audiology Japan』21(1), 52-73.
- 中等教育審議会. 2015. 「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf（2023年8月4日閲覧）.
- 土屋真人. 2022. 『子どもの笑顔がはじける2～5歳児のかんたん楽器合奏曲集』（ナツメ社）.
- 中村礼香. 2018. 「表現活動を通して育まれる資質・能力—音楽表現活動に視点をあてて—」『鹿児島女子短期大学紀要』54, 69-73.
- 朴 守賢. 2022. 「幼児の発達に適合した創造的器楽アンサンブルの提言と実践—PARKS KIDS ENSEMBLEの活動から—」『エデュケア』43, 37-46.
- 水野伸子・津崎 実. 2020. 「幼児期における拍知覚の発達—拍への同期度による検討—」『音楽教育学』49(2), 1-22.
- 持田京子. 2010. 「1～2歳幼児のリズムおよび音楽的発達における共振の重要性」『東京福祉大学・大学院紀要』1(2), 165-171.
- 森真奈美・秋山さやか・石井由紀子・川田千春・渋谷絵梨香・鈴木奈美・横山潤子. 2018. 『年中使える！先

生と園児のための♪こどものうた 130+20 (かんたん伴奏+卒園式用豪華伴奏付)』(ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス)。

諸井サチヨ. 2020. 「園での音楽表現活動の在り方についての一考察～幼稚園教育要領に基づいて～」『淑徳大学短期大学部研究紀要』 61, 129-135.

文部科学省. 2018a. 『特別支援学校学習指導要領解説 (各教科等編 小学部・中学部)』(平成 30 年 3 月).

https://www.mext.go.jp/content/20220715-mxt_tokubetu01-100002983_1.pdf (2023 年 8 月 4 日閲覧).

文部科学省. 2018b. 『幼稚園教育要領解説』(平成 30 年 2 月).

https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf (2023 年 8 月 4 日閲覧).

山内信子. 2017. 「保育内容『表現』の指導に関する研究 幼稚園教育要領の変遷に基づいて」『聖和短期大学紀要』 3, 75-83.

